

T 雄 の 記 録

幼稚園に入園して



四月×日 土 (入園一日目)

朝、幼稚園まで送って行く。

帰り、十一時半に幼稚園の玄関で待っている。

私たちの左どなりを年長組の男の子が二人歩いている。

その一人が、

「ホラ、おすのてんとうむしつかまえたんだ。」

と、てのひらを少しひらいてT雄にみせた。

「どらみせて。」

立ちどまってみせてもらう。

「あなたたち、歩いて帰るの?」

「ウウン、バス。」

「そう、何行き。」

「○○○○行。」

「じゃあ一しょね。このひとT雄っていう名前。毎日一しょのバス

で通うからおねがいますね。」

「ウン。いいよ。」

やせた方の坊やだけ喋って、もう一人の坊やは無言。早速

「このドカン、くぐって行こう。おいで。」

直径がT雄の胸の高さくらいのだカンで長さ二米くらいであろう

か。

先にお口の達者な坊や、次に静かな坊や、最後にT雄がくぐっ

た。

ドカンから出て来た時は、もうすっかり、男の子たちの仲間にな

っていた。

T雄と母の会話

「ぼくたくさん遊んだよ。何して遊んだか当ててよ。」

「ジャンブルジム、ブランコ。」

「うん、それもやったけど、スベリ台も、砂もヘンなもの(抽象玩

具のこと)みんなやったよ。つながむすんであつてのぼるのだけ出

来なかった。」

×

×

×

「お母さん、おにごっこしたんだよ。ジャングルジムのところへ行ったり、ブランコのところへ行ったり、お庭をかけてもかけても、広くて、広くて、とつてもおもしろいの。」

(それはそうだろう。あんなに広いところで鬼ゴッコしたのは生まれてはじめてだから。)

「ぼくね、お腹がすいちゃってお家に帰りたくなっちゃったけどがまんしてたの。」

「お母さん、幼稚園でこんな歌教わったの。『先生きよなら………? みなさん……?』わかんないなあ。」

「いいのよ、覚えたらうたってね。毎日歌う歌らしいからすぐ覚えるわよ。」

最初の日なので、こちらからは何もきかなかった。

7.30	起きる
8.00	食事
8.40	家を出る
8.57	バスにのる
9.15	幼稚園
11.30	お帰り
11.47	バスにのる
12.05	バスおりる
12.15	帰宅
	食事
1.00	ひるね
3.00	お三時遊ぶ お妹と
6.00	食事
8.00	眠る

近所の友達と遊ぶひまはない。

四月×日 月 (二日目)

父が幼稚園まで送る。

帰り、迎えに行く。

バスののりばで

「きのうの『先生きよなら』はね、こういうの。(うたってみるがわからない) わかんないや。」

「いいわよ。思い出したらきかせてね。」

バスを降りて坂道をのぼっていると急に立ちどまって、

「お母さん、こういうんだ。『先生きよならまたあした。みなさんさよならさようなら。』

「上手上手、よく覚えたわね。」

雀が道の端の垣根に止まっていると、必らず、そーっと寄ってつかもうとする。逃げると

「チキシヨウ」

という。この頃使い始めたことば。

工雄と母の会話

(月よう日に身体検査をするという話だったので)

「昔の高さや、重さを計った?」

「しなかった。」

「いつですって?」

「僕が『いつ体の重さ計るの?』ってきいたら『まだまだだずーっとあとです』って。」

「先生とお話する時は、いつはかるのですか?」でしよ。」

「ああ、そうそう。」

「今日ね、あんまり遊べなかったの。」

「どうして？」

「お腰掛けしたり、歌をうたったり、紙芝居をみたり、それでね、あんまり遊べないってわけなの。」

四月×日 火

「幼稚園に泣き虫な子がいるの。すぐ泣くんだよ、A'っていうの、へんな顔してるの 僕のきらいな顔。」

帰り道に一人の男の子が立っていた。

すれちがう時に、

「なんだよう。」

「なんだよう。」

「やるか」

「やるか」

つかみ合い。

「I雄さん！」

I雄はやめてこっちへ帰るきわに、男の子に

「覚えてろ！」

「I雄ちゃん、どうしてケンカになったの、あの坊やが先に叩いたの？」

「ウウン、お母さんそう思った？ 僕が先に叩いたんだよ。」

「アラ、どうして？」

「だって僕のきらいな顔しているんだもの。」

夜菌みがきをしながら、

「お母さん、幼稚園でガラガラブーしたの。お家じゃないと恥ずかしくてよく出来ないよ。でも、先生がしなさいっておっしゃったから、その通りしなけりゃいけないし。」

分別くさいことをいうので、こちらがテレくさくなつて笑いながら

「フーン」というと、

「ねえ、そうでしょう。」

と念をおす。

フトンに入って、

「今日お話お休み？」

(毎日寝る時に話をする。)

母の知っている話、母の小さい頃の話、母のデタラメ話、いよいよタネがつかると詩を読む。それも面倒な(?)時は、
「お休み」にする。「お休み」の時はI雄がお母さんに話をしてくる。いままでは大抵、カチカチ山の話であった。)

「お母さん、今日は僕がお話してあげる。幼稚園の話。」

「幼稚園にはね。いくよちゃんって名前の子がいるよ。行くよ、っていうのは男の子のことばでしょ、女なら「いきますよ」ちゃん

の方がいいのにねえ。」

「ねえ、お母さんおもしろいでしょ。じゃあもう一つ。」

「僕、鉄棒でこういうの出来るの、（おなかをつけて一回転するのをやってみせる）幼稚園で一番おもしろいの鉄棒だな。」

「お母さん、それから、それからきいてよ。いっぱいお話ししてあげるから。」

（育児書などに、幼稚園から帰ったら、それからどうしたの、何をして遊んだのと次々ときいてはいけないと書いてあるので、子どもの話だけをきいていたが子どもに催促されて、苦笑してしまった。）

四月×日 水 （四日目）

家に帰ってすぐ、

「お母さんみていないで。」

「はい。ごはんの支度していただきますからね。」

「ホラ、出来ちゃった。」

（いつもは洋服をぬぐだけ。母が片付けているが、今日は自分でハンガーにかける。）

I 雄と母の会話

『先生さよなら』をうたっている時、Aちゃんが、『ぼくしらないから、グッドバイやってよ』っていったんだよ。そしたら先生が『知らなくても、皆と一しょにうたっていれば、うたえるようになりますよ』って。それで一回だけグッドバイうたったんだ。』

× × ×

「おすべりやる時にみんな背中を押すんだよ。」

「あぶないことしちゃだめよ。」

「ウン。すべる時に背中を押してやるんだよ、すぐすべれるでしよう。」

「お調子にのって、前の人が坐らないうちに押ししたりすると危ないわよ。」

「ウン。」

× × ×

「お集まりのとき、まだあつまらない人がいると、先生が僕に『皆をよんで来てください』っておっしゃる事もあるよ。」

「いつも僕におっしゃるの?。」

「ウン、いろんな人、僕の時もあるの。」

「名前わからなくてもわかる?。」

「ウン、胸のさくらの花をみればすぐわかるでしょ。ももいろがはなのくみだから。」

きいろはことりだよ。お母さん知ってる?。」

× × ×

「いつも幼稚園で誰と遊ぶの?。」

「名前のしらない人。B男とも遊ぶ。」

四月×日 木

I 雄と母の会話

「きょう、つまんないの。」

I 雄と母の会話

「あなたのエプロンのポケットには必らず砂が入っているわ。」

「ウン、A'ちゃんとC'郎ちゃんが、砂を僕になげたんだ。」

「どうしてかしら、何かあなたがしたんじゃない？」

「僕なんにもしないよ。」

「僕はなげたの？」

「ウン、投げなかったかな。なげた。」

「投げられたら逃げればいいのよ。」

「先生がね。こういうふうには口を手にあてて口をパクパクさせ、よぶマネ) 大きな声でどなっているんだけどきこえないの。」

「C'郎ちゃん。C'郎ちゃん。っていったらいいの。」

× × ×

「今日はイタズラコロちゃんやったけど、少しでやめちゃった。」

「そう。」

「めろんのことをむずかしく言うとなーに？」

「さあ、どうして。」

「めろんひめ!？」

「うりこひめかな。」

「そうそううりこひめだった。」

「うりこひめとあまんじゃくやったの。」

「うりこひめとあまんじゃくの話をごまかに話しはじめる。」

「あまんじゃくがうりこひめになるところで」

「僕はすかしいなあ。」

「何が、ちっとも恥ずかしいことないでしょ。」

「だって、あまんじゃくがうりこひめにばけて、「あたし」っていうんだよ。」

「いいわいいわ。やって。」

「あたし」と女の子のような声を出して

「やっぱり恥ずかしいよ。」

夜、自分で「童謡ものがたり」を見ていた。(佐藤義美著。半年

ほど前から毎日見ている。目次で頁をしらべ、すきなところをあけてみるのがたのしみらしい。)

グッドバイが出ているので、しきりによんでいたが、

「お母さん、ぼくこのうた、おわりまでうたえるよ」

「そう。」

「幼稚園では？」

「いつも一番だけ。」

「それじゃ、僕覚えたからって幼稚園で五番までうたっちゃダメよ。」

「うん。家だけでうたう。」

寝る時もうたった。翌朝、お父さんにもうたってきかせた。

「ずい分ながいのによく覚えたね。何で覚えたの。」

と父にきかれて。

「ぼくの本。これだよ。」

わざわざ本を出して来て得意そうだった。

いままでグットバイ・グットバイとうたっていたが、その本にはグッバイ・グッバイと書いてあったので、五番ともグッバイと忠実

に歌う。

幼稚園でやった歌で、この本にのっているうたはグッドバイが始めである。

四月×日 土 (七日目) 雨ふり

「今日、一まわりして皆を送ってね、バスのところへ来たら、ちょうど、バスが来たの。」

「今日、外で遊んだと思うか、遊ばないと思うか。」

「遊ばない。」

「そう。どうしてわかる？」

「だって雨ふりですもの。」

「そうか。」

「今日ね、お絵かきしたんだよ。」

「そう。」

(T雄は絵をかくのが好きでない、どうだったろうか。何てきこうかと逆う。)

「僕、ロボット一つ描いたんだよ。『もつと一ばいかきなさい。このわきの方にもかきなさい』っていうんだよ。」

「おっしゃった。」

「ウン、おっしゃったの。」

「人間かこうと思ったけど、どうやってかいていいかわからないし、ロボットもう一つかこうと思ったけどかけないの、

『先生もう書くものがない！』っていったら、『そう、それじゃあ、いいです』っておっしゃったから出したの。」

T雄は絵をかくのが苦手だ。

T雄は家でどう書くかを教えないので、形ができなくてつまらないらしい。

まだ錯画である。どんなふうにかけていても「お母さん、これ」ともってくると、「上手にかけたわね」という。すると、

「お母さんはいつも上手だってほめるけど、ぼくはちっとも上手だと思わないナ N子ちゃんや、M子ちゃんは、女の子だとか、おたまじゃくしがかいてあるから上手だってわかるけど、ぼくのはただくしゃくしゃって書いてあるだけなのに」という。

返答にこまってしまう。書きたいという時までそっとしておこうと父と話している。

父が日曜ごとに油絵を書くので、それをみていたり、スケッチに多摩川ベリに出る時は、家中で出かける。T雄たちは草の上で遊び、父のスケッチしている姿を見るだけでいいと思っている。

書きたくなければ、画用紙でも、木炭紙でも、キャンバスでも、クレヨン、バステルでも道具がそろっているのだから、ひとりでにかき出すだろうと思っているのだが。

今は絵をかくより、クレヨンのへり方がおもしろいらしい。

「ホラ、横にかいたら、クレヨンがとんがっちゃった」「ひらべったくなっちゃったよ」という調子。また、「僕、もも色のつくりかたしってるよ、やってみようか、白をぬっておくでしょ。それから赤をぬってホラ、この通り。」

また、赤ちんの筆や、新しうがをたべてのこったくき(茎)に醬油をつけてかくという事がたのしいらしい。

そうだ、家にはどろえのぐがなかった。絵の道具は何でもそろっていると思っていたのでツイうっかりしていたが、T雄にどろえのぐを与えたら、よろこぶかも知れない。

家の中で画用紙をぬっている時はこれでいいのだが、N子ちゃんたちと「遊び」として絵をかくときは、何か形が出来てないと、

「なーこれ!!」「何をかいたの」「へー」などといわれてしまう。それがT雄には恥ずかしいのである。

二、三日前、N子の家から帰って

「今日は何をしたの」

「絵をかくの」

「そう」

母が何とおうかどことばを考えていたら、

「T雄ちゃんはお絵かき出来ないからって先生にしてくれたの」

「そう、よかったわね」

家では、画に關しては幼稚園へ行くまで白紙のままですごせたいと思う。

はじめて、大勢の友だちと、やさしい先生に見守られて、皆と一しよにたのしく絵をかくよろこびを味わせてやりたい。

「上手にかけた人ははられたんだけど、僕、はられなかった。」

「何人くらい。」

(じいっと数えて)「十ぐらいかな。」

「フフフどんな気持した。」

「イヤーな気持。」

「フフフフでもね、はられなくてもいいのよ。またこんど紙一ぱいに書いたときに、先生がはってくださるかも知れないもの。お母さんはT雄ちゃんがたのしく書けたらしいから、よかったなと思ってるの。」

(ほんとによかった。ロボット一つでもかけたのはほんとうによかったと思う。)

「今日、幼稚園でグットバイやった?」

「やらなかった。A'が休みだから。」

「あなたたち、幼稚園では「A」とか「B男」とかってちゃんもきんもつけないの?」

「うん。ときどき、B男ちゃんともいうけどね。」

先生の記録

T雄がつくったチューリップの手さげは、チューリップのまんなかだけ壁をぬりつけるようにクレヨンが厚くぬられており、ふちのほうは白のままであった。担任の先生にきいてみると色をぬるときいつも同じような傾向がみられるという。記録によるとT雄はクレヨンのへり方がおもしろいということであるが、なるほどそうかも知れない。

月よう (八日目)

帰って来て、

「洋服とりかえるの たいへんだなあ。」

「お母さん、ぼく今まで「A」っていつたでしよ。「A」っていうんだった。」

「そう。」

「今日、まやおやすみ。」

「病氣かしら。」

「そうじゃないでしよ。ああ、幼稚園行くと洋服きかえるのたいへんでしよ。だからじゃない？」

(真剣な顔をしてこういうところを見ると、よほど洋服をとりかえるのがたいへんらしい。)

「お母さん、ぼくのロボットの絵、はってあったよ。」

「あらそう。よかったわねえ。」

「ウン、つまんないなと思つていたでしよ、それが今日行つてみたら、はってあったの。」

この日からひるねをしなくなる。

たつちゃんと久しぶりに遊ぶ。

幼稚園へ行くようになってから、高い所へ平気でのぼれるようになった。

I 雄と母の会話

「今日ね、また砂かけられちゃったの。何もしないのに、僕にばかりかけるんだよ。」

「それでI 雄ちゃんは砂かけなかったの。」

「僕、お母さんにいわれたの忘れて、少し、お返ししちゃったの。」

「だめねえ、砂をかけられたら逃げなさいっていったじゃないの。」

「爆弾だっていうんだよ。それで下においておけば破裂するっていうのに僕にボンてなげるの、だからおあいこにネ、ちよつと。」

「ほんとにちよつとかな。」

I 雄の幼稚園での状況 — 先生の記録より

I 雄が入園して一週間ほどの間は、組の先生も親から離れない子どもたちに手がかり、その意味では手のかからないI 雄はどちらかといえば落ちついてしっかりしているようにみえた。二週間目になると、そろそろ先生のいうことをきかなくなった。一月たった現在でも、やはり、いろいろと先生を困らせる。並んでいるなかで理由もなく体をほかの子どもにもぶつけて列を乱したり、洗ったばかりのおぼん(おべんとうの時使う)に泥をつけてみたり、いたずらも過ぎるようだ。I 雄は四才児にしては大きいほうで背もたかく体つきもがっちりしている。体力をもてあますこともあろう。しかし、このような集団生活への不適応な行動は、何に根ざしているものだろうか。家庭での生活記録は十一日目から幼稚園のことを殆んどしゃべらなくなつた、と書かれているが、幼稚園での不適応な行動を暗示するものを強いて求めるならば、そのへんにあるかと思われただけである。I 雄については、家庭との連絡をもとに、幼稚園での行動観察をあわせ考慮して、はやく問題解決のいとぐちを見出さなければならぬと思つている。

「そしたら先生によばれて『おこしかけしなさい』って。絵をかけたの。お家と丸をかけたけど、線だけでかいた。」

「きのう（土曜日のことか）名前知らない人が先生に積木をなげたらね、先生のホッペタに当たったの。それでね。あずけられちゃったよ。アハハハハ。」

「どこ。おとなりのくみ？」

「ウウン別の部屋、ベットかなんかあったよ。」

× × × × ×

「I 雄の先生、どう。」

「Y せんせい好きだ。」

「どういふところが好き。」

「からだぜんぶ。顔も好きだな。」

× × × × ×

「むすんでひらいてやってね、その手をお星さまってするの、そうすると先生が、『お星さまの下で子どもは何しているでしょう』『ねむってる』でおねんねするのね。それでどうさんやら、ねずみさんの泣き声するの。先生ったら『べんじょう村のねずみさん』だって」（たぶん『てんじょう村』というのだろうが、便所とききちがえているらしい）

「フフ皆、笑った？」

「わらったよ。大笑いさ。」

火よう （九日目）

I 雄と母の会話

「今日はブランコしたかしらないか。」 「した。」 「そう。」

「おすべりしたかしらないか。」 「した。」 「そう。」

「おすなしたかしらないか。」 「した。」 「そう。」

「いたずらしたかしらないか。」 「した。」 「そう。」

「どんないたずら。」

「あのね、女の子がおままごとしてたの。そこを通ってね、足でお

ままごとこぼしちゃったの。」

「あなたが通るようなどころでおままごとしてたの。」

「うん、せまいとこでやってるの。」

「せまいところに行くご用があったの。」

「うーん、どうかな、わすれた。それでね、先生におこられちゃった。」

× × × × ×

「また、今日知らない子が砂で戦争ゴッコしようっていうんだよ。だから、ダメだよっていても、どうしてもやるっていうんだ。」

胸にさげたハンカチについて——先生の意見

入園すると、子どもは胸にバッジと桜の形をした名札とハンカチをつける。この桜の形の名札は組によって色がちがい、入園当初は先生もつけることにしている。子どもはその先生の組前がわからなくても、また先生の顔を忘れたとしても自分の組の先生のところへはいくことができるし、子ども同士も同じ組のお友だちということがわかる。もし字のよめる子どもがあれば、ついでにお友だちの名前も覚えられるわけである。スクールバスにのる子どもは乗り降りする場所もかいてある。この名

「砂かけられても、お返ししなきゃいけないっていうの覚えてた？」
「うん。僕全部ザッザッってあけちゃったの。」

「ふーん、でも、人がやっているのに、後から行っていきなり次々にこぼしたりすると、皆に嫌がられますよ。」

「大丈夫。他の子が売り屋さんになって、僕が買っってはザッ、買っではザッってこぼしたの。」

「それならいいわね。」

「わけもいわないでいきなりこぼしちゃったりすると、皆がT雄ちゃんが来ると逃げようになっちゃうと思って、お母さん心配しちゃった。」

胸にさげたハンカチについて。

鉄棒が好きで毎日やって来る。鉄棒をやるたびにハンカチが鉄棒にまきつくという。最初の日、ハンカチを糸でとめてやったが、とって来たので、エプロンの引っぱりっこでもしたのかと思ひ、とれてもすぐつけられるようにと安全ピンにした。その後鉄棒をするたびに、ハンカチはとれないで、エプロンの布がきれて来る。エプロンの布がきれるのは少しもかまわないが、どのように巻きつくのであろうか。エプロンがきれるのであるから、相当強く引っぱられるのであろう。

ハンカチは何の為に付けているのであろうか。名前をわからせるため——それもある。がそれだけだったら一枚の布で胸にしっかりととめたらいい。——戦争中を思い出してイヤだが——手をふく為であろうか。T雄の場合はポケットに別のハンカチを入れてあるので胸のハンカチではふかないという。が、この

札は一月もすると汚れてあるものは破れたりして用をなさなくなる。用をなさなくなつたからといってまた新しくつけ直す必要はないであろう。一月もたれば組の先生も組のお友だちもわかるであろうし、バスの乗り降りする場所も乗務員が覚えてくれるからである。

胸のハンカチはそういうわけにはいかない。汚れたら洗濯して、きれたら新しくかえていつも胸にきれいなハンカチをつけていてほしい。名前がわかるために必要なのはなく手をふくものとしてハンカチが必要なのである。もちろん名前のかいてあるところを表に出してあれば名前を知るにも都合がよい。しかし名前がかいてあれば表に出ているのは何でもよいと思う。かわいことりや犬の刺しゅうや花もようなど子どもの胸にいつそう愛らしさを添えてくれる。手ふきという実用性と同時にアクセサリーもかねているといえようか。幼稚園には胸のハンカチとは別にタオルの手ふきを各自用意してあつて、ふだん手を洗つたあとはこの手ふきを使うが、お帰りのとき靴をはきかえてしまつたあとで手をふく必要がおこつたらわざわざタオルの手ふきをとりに行くまでもないし、また幼稚園へくる途中、家へ帰る途中でも必要になれば胸のハンカチを使つたらよいと思う。子どもが胸のハンカチを使わないとすれば、それは、使つてはいけないと思ひこんでいるかハンカチの存在を忘れているかどちらかであろう。もつとも手ふきとしてポケットにもう一枚ハンカチをもっているならば胸のハンカチはアクセサリーにすぎなくなるし、何のためにという疑念がわいてくるのもむしろ当然と思うが。

考えさせられるひとつの問題ではある。

ハンカチは、幼稚園で全員お揃いのものであるから、T雄だけやめるといふわけにはいかない。

昔から、おびただしい数の新入生がつけていても、胸のハンカチの為に、鉄棒その他で事故をおこしたというのはきいた事がないので大丈夫とは思うが。

一度、T雄が鉄棒をするところを、先生にみていただきたいと思うのだが、大勢園児がいる中で、自分の子どもだけお願ひするのは厚かましいようでお願ひ出来ないでいる。

金よう(十二日目)

先生が金のがちようのご本を見せてくださった。「金のがちよう」の話をくわしく見てきたようにはなす。

「だれかお友達出来た？」

「まだ。たいてい一人で遊んでいるんだ。ぶらんこしたり、鉄棒したりね。」

殆んど幼稚園の話はしなくなつたが、時折、妹が母のいうことをきかないですねえているときに、

「とみこちゃんにあまんじやくがついたかな おとしてあげましよう。」

「アラ、T雄ちゃん、フフフフ。」

「よく先生がおっしゃるよ。〇〇ちゃんが廊下に寝ちゃった時、先生があまんじやくがついたんでしようって、サカサにだいちゃつての。」

幼稚園のお友だち。

「T雄ちゃん、お友だちの名前覚えて？」

「少しならね。」

「いつも誰と遊ぶの。」

「きまつてない。ひとりの事もある。」

「どんな人がいるかお話してよ。」

Aちゃん。

「いつも話してるから、お母さん、知ってるでしょ。」

B男ちゃん。

「あそばない時もあるけど、遊ぶ事もある。」

D男。

「男の子なのに、女の子のお便所でおしっこするよ。」

E男。

「スキップするとき、かけ出しスキップだよ。」

実演してみせる。

F子。

「『そのオ手をお星さま』ってやるでしょ、お手々をね、キラキラやつたとき『ほんとにきれいなね』っていったよ。」

G子ちゃん。

「おいしやさんの家の子だよ。」

G'子ちゃん。

「もうひとりネG子ちゃんという人がいるの。」

H子ちゃん。ともう一人のひと(名前はわからない。)

「僕、Hちゃんともう一人のひと、いじめちゃうんだ。帰る時。い

つもの時もあるし、今日はいじめなかった。カバンでね、『アーコーラ』ってやるの。(追いかけるマネ) 逃げるよ、笑って。そうすると、先生に僕がおこられる。先生におこられるにきまつてるよ、Eもおこられる。(どうして) 一しよにやったから。(どうして追いかけたりするの) 理由はわかんないよ。自分でもわかんなくてもやる事があるんだもの僕は。』

I子。

I子っていう人もいる。みたことないから知らない。(どうして名前を知ってるの) だって先生がよぶんだもの。(袋やなにかを渡すときに名前をよぶ。)

I子ちゃん。

「ちょっと気にいらなんだけど。言う事が変だし。ベチャベチャいうの。笑い方も変。」

Iちゃんと手をつなぐのいやでね。はなそうとしたら、Iちゃんが手をこうしたの(手をつなごうとするマネ)

先生がね、

『僕の手がかわいいってくすぐってる』っておっしゃったよ。』

「この他にはアーK、L、Oちゃん、P 郎、Q 郎っていう人いる。」

「他の組の人だけどおきむっていう人もいる。『きみさるどしかい』ってきいたから『ぼくさるどし』っていつてね『僕はおきむだろう、だからおさるどしなんだよ』っていつてた。」

。。。。。。

。。。。。。

四月号に私は新入園児を迎えるにあたって述べたなかで、子どもたちの幼稚園に対する期待と幼稚園の準備がくいちがってはという点についてふれておいた。子どもたちが幼稚園へ入って見たとき、それは思っていたとおりに楽しいあるいは不安なところであろうか、それとも思いがけずということになるであろうか。そのへんに新しい生活への馴れが早いかおそいか適応の問題がひそんでいるかも知れない。私は子どもの心に描かれているものを知ることができたらと思ひ、新入園児保護者会のとくに次頁上段のようなアンケートを出してみた。入園までの一か月余り子どもの話が幼稚園のことにふれたときの話の内容をできるだけ詳しく書きとめていた。子どもたちの幼稚園についての期待あるいは不安などの対象をつかんでおきたいというのがこのアンケートの目的であり私の意図でもあった。

アンケートの集計は、各項目ともよろこび期待している状態に入るものと不安に思ひ心配している状態に入るものとにわけ、それぞれのなかで、どのようなことに期待あるいは不安をもっているか対象をできるだけこまかくとって延べの数を出してみた。ここでは紙面の都合上こまかい対象をまとめて比較的数の多いものをあげたのが次頁下段の表である。

(1) 幼稚園へいくことについて

スクールバスにのれることがうれしいのは男の子に多い。「もも色でなかのいすは赤いんだね」、「もも色」とクリーム色の大きいバスね。早くのりたいな」と色の美しきにも心をひかれるようであ

◎ お子さんは幼稚園についてどのようなことをお話になりますか。
左記の項目についてお書きください。

(入園をまちがれていたり不安に思っていることなどお子さんのお話
に關することを何でもお書きください。御参考までに記入例をあげておきます。)

項 目	話 の 内 容	
	例	例
幼稚園へいく ことについて	○「幼稚園へいくのバスにのっていくんだね」と喜んでい たら少々がっかりした様子である。○「ママついてきてよ」とい 何度も念をおす。	○「幼稚園へいくのお友だちがいっぱいいるでしょ。たくさん遊べ るわね」と心配そうである。○「先生こわい？」とたずねる。○「やなん だ」と心配そうである。
友だち(幼稚園 先生について)	○「幼稚園におおきい積木あったね。あれで遊べるの？」とうれ しそうである。○「庭ひろいね。かけっこしたら一番になつち やうな」などいう。○「ブランコおれないのね」と心配そ う。○「幼稚園の歌おしえてあげるわね」とはりきっている。○ 「ほく電車しかかかないんだもん」と困った様子なのでそんな こと心配しなくていいのよといっておく。	
遊 具 いろいろな遊 びについて	○「幼稚園におおきい積木あったね。あれで遊べるの？」とうれ しそうである。○「庭ひろいね。かけっこしたら一番になつち やうな」などいう。○「ブランコおれないのね」と心配そ う。○「幼稚園の歌おしえてあげるわね」とはりきっている。○ 「ほく電車しかかかないんだもん」と困った様子なのでそんな こと心配しなくていいのよといっておく。	
そ の 他		

(組・お子さんの名前)

る。おべんとうが楽しいというのもうなすける。「おべんとうは何
もっていったらいいかな。そうね、たまごサンドイッチね」と女

項 目	よ ろ こ び ・ 期 待	不 安 ・ 心 配
幼稚園へいくこと について	スクールバスで通う.....40	ひとりていく.....44
	淡然とした喜び.....26	淡然とした不安.....19
	おべんとうがある.....17	その他.....37
	その他.....17	
友だち(幼稚園での) 先生について	友だちとあそべる.....62	友だちがあそんでくれるだろ.....30
	先生はやさしくていい人.....10	うか友だちにいじめられるのでは.....15
	先生は何か教えてくれたり何かしてくれたりする.....10	その他.....55
	その他.....18	
遊 具 ・ いろいろな遊びに ついて	遊具にのれる.....32 (ぶらんこ・すべり台など)	絵がよくかけない.....31
	遊具であそべる.....22 (積木・人形など)	その他.....69
	絵をかく.....16 歌をうたう.....16	
	その他.....30	
そ の 他	新しいものをもっていきける.....58	いろいろなことがひとりです.....33 きないときどうしようか
	その他.....42	その他.....67

(数字は%)

の子。この子どものお母さんはおべんとうを持って通園することが
ハイキングのような楽しみをきそうようですと書いています。しか
し、また、おべんとうの時おはしがうまくつかえないからと心配す

る子どものあることも心にとめておきたい。

おたんじょう会やこども会が楽しみというのは兄弟姉から聞いたものであろうか。とくに、そのような時お菓子をもただけることがうれしらしい。「幼稚園についてお母ちゃんにお菓子もってきてあげる」とこれは三才の女の子である。

不安はやはり「ひとりでゆくこと」に集中している。「幼稚園へひとりで行くの？ みんなひとりで行くの？」とこの男の子は、ひとりで行かなければならないかも知れないという不安とできることならついて来てほしいという願いをこめているのだが、お母さんは何と答えたのだろうか。入園後すぐにお母さんからもはなれ、今では幼稚園にもすっかりなれている様子であり、いま思えば不安もその時だけであったのかも知れない。「ぼくはまだ小さいからバスはママといっしょでないとだめだよ。ママもバスでいっしょにいこうね」という男の子は、入園式のある日からスクールバスでひとり通うことになったが、二、三日は朝バスからおりると泣き、帰りは先にとび出そうとして何度もひきとめなければならなかった。「電車やバスにひとりでのれないからついて来てね」と家中の者に頼んだという男の子は二、三日お母さんがついて来たが、その後スクールバスで通うことになり、ひとりで来られるようになった。

この項目については、このほかこれといっはつきりした理由なしにただ幼稚園へいきたいなあと憧れにも似た気持で入園を待ちこがれている子どもがほとんどで幼稚園へいくのが何となく不安だという子どもがいくらかいるという程度である。

(2)友だち(幼稚園での)・先生について

行動	場面	登母と離れな ば10.00	園ね 10.20	並んで講堂 に入る	講堂に入っ ている	皆で保育室 へもどる 11.00	記念写真を とる	保育室に入 る 11.30
教師にくっついて離れない		1				1		
母親からはな れない	泣いて	2	1			3		
	だまって	7	3			2	3	2
母と教師を間違え、てれか くしに母に乱暴する		1						
母親をしきりに呼ぶ					1			
団体行動の最中母の所へ行く					2			
団体行動の中に入らない							3	2
理由なく他の子どもに乱暴		1			1		2	
けんか								1
いたずら								6

この幼稚園の新入園児は全部で90人、うち一割が3才と5才、残り9割は4才児である。この子ども達が初めて集団に入った入園式の日、不適応とみられた行為の延人数を示したのが上表である。(項目は整理しなかった。この日は殆んど母親と一しょの行動が多かったという特殊事情も考えねばならない。またこの日は、何度もお手洗いにいく子どもが非常に多く、講堂の中にいる40分の間に、四回も通った子さえいた。)

なお、この子ども達は、一週間すぎた頃には全員が親から離れ、幼稚園の生活を楽しんでいる。

幼稚園へいくとたくさんのお友だちと遊べるからうれしいというのは、子どもたちの家の大部分が住宅地にあり、ひとりっ子か、多くて三人というような兄弟数。しかもとなり近所に気軽に行き来して

あそべる同じ年ごろの子どもが少ないことなどが原因であろうと思ふ。しかし近所から友だちがいっしょに来る子どもは別として、幼稚園では、どちらかといえばまだひとりひとり勝手にあそんでいる子どものほうが多い。砂場などでは二、三人かたまっていっしょに山をつくったり汽車をはしらせたりしているが、それもながくは続かずいつしよにいる先生がぬけたりすると間もなくこのグループもくずれてしまう。ただ、あそぼうと思えばいつでも同じような相手を見つけることができるし、声をかけようと思えばかけられる相手のたくさんいることが子どもたちにとっては心強くもあり、そうした雰囲気につつまれているのは楽しいことであろう。もっともこのようなことがむしろ不安になる子どもたちがいることも事実であるが。「おともだち大ぜいいるよ。ぼくの友だちだからお父さんもお母さんもお兄さんもいったらいけないよ」「幼稚園にいったらお友だちみんなうちにつれてくるから、ママお菓子ちょうだいね」とはりきっている子どもたち。「かかってきたらやつつけてやる」というのは女の子。この子どもはけんかでお兄さんにきたえられているので強すぎて困るとのこと、近所からいっしょに来る女の子と二人で入園当初は勝手きままにふるまうことが多く、先生を困らせたようである。友だちについての不安のなかで、友だちにいじめられはしないかという心配のほかに、お友だちの名前がわからないという子どもが何人かいる。先生が子どもの名前を早くおぼえなければならぬと同じように、子どもたちもおたがいその必要にせまられているといつてよいかも知れない。先生としても入園当初のための配慮は必要であろう。「幼稚園のお友だち知らないね。あそんでく

れるかな。」「幼稚園いってもお友だちいないから誰とあそべばいい?」このような心配はどの子どもにも共通であろうと思う。ちょっと手をかしてやればあそびにのってくる子ども、手をさしのべてもためらっている子ども、拒んでいってしまう子ども、「お友だちがあそんでくれなかったら積木であそぶからいいわ」という独立型の子ども。あそびの面ひとつについて考えても子どもたちの受け入れ方にはいろいろな段階があり、先生の手助けも子どもひとりひとりによって違ってくることになる。

先生については、「幼稚園に男の先生いる?」と心配する子どももあるが、ほとんどが先生をママかお姉さんのようにやさしくしていっしょにあそんでくれる人と思っている。ある男の子とお母さんとの対話をぬき書きしてみよう。

子「先生って女の人?」

母「そうよ。」

子「女の人でもお洗濯やおそうじしないで子どもとばかりあそんでくれるの?」

母「そうよ。先生はいつも子どもとあそんでくださるのよ。」

子「幼稚園の先生はいつもあそんでくれるなんていい人だね。ママはあそびたくてもごようが多くてあそべなくてかわいそうだね。」

この子どもはひとりっ子で、だいぶおませのようであるが、子どもの目にうつった先生の姿のひとつともいえようか。

先生が何か教えてくれるとか何かしてくれる(たとえば紙芝居など)ことを楽しみにしている子ども、「先生ぼくの絵じょうずですよってほめてくれるかな」とほめられることを待っている子ども。

先生への期待は大きい。

(3)遊具・いろいろな遊びについて

ぶらんこ、大きなすべり台が一番多い。「幼稚園にいろんなものあっていいなあ」という子どももやはりぶらんこ、すべり台が楽しかったらしい。屋外遊具ではこのほか砂場、プレイスカルプチュアなど、屋内では大きな箱積木が魅力だったようである。

「幼稚園の積木大きいわね。あれであそぶと大きいおうちができてやうね。」という女の子は自分がお母さんになっておうちごっこをしたいと夢みていたことであろうか。ごっこあそびについてはままたごとあそびが一番多く、そのほかは電車ごっこがひとつ出てきただけであった。あそぶというより、とにかく幼稚園にある遊具をひとりですべて試してみたいというのが子どもたちが幼稚園へはいつてまっさきにしてみたいことではないかと思うのである。子どもたちの会話を耳をかたむけたい。

「幼稚園にいろんなものあるから早くいつて全部のっちゃう。」

「ぶらんこやすべり台は順番にのるんでしょ。だけどぼく急いで走って一番にのるんだ。」

子「ぼくね幼稚園の積木みんなとっちゃうの。」

母「そんなことしてはだめよ。みんなであそぶのよ。」

(困った様子で)

「お友だちの幼稚園で作るといいね。」

絵がかけるとか歌が歌えるところにいる子どもがある反面、絵がかけない、字がかけない、あるいはスキップができないというような心配も出ている。

子「幼稚園にいったらお絵かきしなくちゃいけないの?」

母「かきたくなければかかなくていいのよ。」

この子どもは不安もなくなるであろうが、絵や字など家でむりに教えたりすることのないようにしてほしいと思う。なかには「絵をかくと手がよごれていやだなあ。幼稚園に石けんあるかな」という神経質な子どもがあり、入園当初うわばきをはかずに持ちあるいてくつ下のままでいようとするので、うわばきをはかせるのに先生がひと苦労であった。

(4)その他

幼稚園へかばん、くつなど新しく買ってもらったものを持っていくけるよろこび、身体検査の時、注射があるとかいろいろなこと自分でできないときどうしようかという不安、ことに後者は新入園児には共通なことであろうし、当然のことながら先生も気をつけてやらなければならない。

子どもたちの会話を中心にアンケートのまとめを続けてきたが、これはまとめとして終るのではなく、むしろこの先子どもたちがどのように幼稚園生活に適應していくかをみるための参考資料としてなお活かしていかなければならないものと考えている。ここにあらわれた子どもの不安や期待が、あるものはそのまま、あるものは形をかえてまだしばらく続くいくかも知れない。子どもを甘やかすことなく期待をはずすことなく、子どもたちが幼稚園が楽しくてたまらないというような雰囲気をもち続けていく上にこのアンケートのまとめを役立てていきたいと思う。

(K)